

# ラグパパ、待望の CD がついに完成！



左から秋元慎、ジョッシュ大塚、勝木徹芳、神田修作、前列、さわむらしばる

神戸を本拠地に活動する Ragpapas' Jugband (以降、ラグパパ) が遂に CD を完成させた。日本語のオリジナルや有名ブルース、フォーク、オールドタイム、そしてブルーグラスのカバーからなるこのアルバム。メンバー全員が超ベテラン・ミュージシャンで、個々のバンドのハンマスをつとめるだけあって、ツボを押さえた聴かせどころがたっぷり。加えて、関西ならではの絶妙のひねりが効いた笑いもキマる。

もちろん、ストリング・バンド系ジャグバンドらしい、たぐみな演奏は素晴らしい！ ブルーグラスのリスナーにもぜひおススメしたい、聴くほどに元気が湧いてくるアルバムだ。

文 / 片山 明

今回のアルバムリリースに先立つこと昨年11月にNHK神戸のサテライトスタジオで開催された「神戸ジャグマーケット」で彼らの演奏を聴いた、いや見た。幾つかのバンドが出演する中であつたから、決して十分な時間枠を与えられていなかったものの、彼らのパフォーマンスは際立つもので、トリを飾った横浜ジャグフェスの仕掛け人、ムーニーさんをサポートしてのものまで、演奏の質から魅せるステージング、さらにはジャグバンドの楽しさを一般にまで届けようとするひたむきな啓蒙精神まで、実に見事なものだった。どうやら、この時期、彼らは今回のアルバムのレコーディングに励んでいたらしい。

## スゴ腕揃いの粋な5人衆

各メンバーのプロフィールをさらっておこう。関西フォークの草創期を牽引したフォークキャンパーズのメンバーで、日本のフォーク・リバイバルに深く関わってきた勝木徹芳 (g,bj,harmonica,kazoo)、ブルーグラス45のメンバーとして日本人のバンドとして初めて全米ツアーした経験の持ち主で、自身のバンドやソロ活動で長く関西のブルーグラスシーンを賑わわせてきたジョッシュ大塚 (g,bj,f)。

故フリッツ・リッチモンドからその奏法はもちろん制作まで直接手ほどきを受け、日本屈指のタブ・ベース奏者として知られ、また多くのアーティストとのセッションも多く、70年代の香りを漂わせるシンガーソングライターでもある神田修作 (tab base,g,harmonica,kazoo)。現在もリーダーを務める

春待ちファミリー・バンドを率いて早くから日本のメインストリームのジャグバンド・シーンで活躍し、同時に子供達を対象にした手作り楽器によるバンドでの活動も旺盛な、“社長”ことさわむらしげはる(washboard,kazoo,g)。

そして、ビル・モンロー・スタイルのマンドリン奏者で、本場米国のブルーグラスフェスのコンテストでの入賞経験や海外のアーティストとの共演も豊富。また、長年本誌アルバムレビューで健筆も振るう一方、関西を中心としたイベント・プロデューサーとしても活動している秋元慎(m,f)の5人からなる。

正式なスタートは2006年頃のことだそうで、その年の3月にはトムスカピンの麻田浩氏の呼びかけで実現したジム・ケスキンの来日時に幸運な共演を果たしている。



2006年3月、ジム・ケスキンの共演！  
(大阪・千日前アナザードリームにて)

冒頭の神戸ジャグマーケット。宴もたけなわの頃、ウォッシュボードのさわむら“社長”が客席に降りてくるや座っている観客を促し立たせる。たちまち隣人同士手をつなぎ、人の輪が出来ていく。それが前方の客だけにとどまらず、さわむら“社長”はいっしょか会場中のほぼ全員をダンスの輪に引き入れてしまったのだ。ジャグバンドなんて聴いたこともなければ、その名を知ったのもこの日が初めてという超素人さんたちが、延々と繰り返されるバンドの演奏に合わせて笑顔で踊っている！ その最中、さわむら“社長”の姿はと目で追うと、なんと当人はガラス窓の向こう、トアロードに行く行人まで招き入れようと奮闘しているのだった。この圧巻な光景はある意味、ラグパパを象徴しているように思えた。

どんなに高度な演奏を聴かせても、乗れなければ意味がない。お客さんをバッチリ楽しませながら、ツボを心得た心地よいグルーブを繰り出してくるジャグバンドの鉄則を、これほど両立させているバンドは他にあるだろうか。

肝心のアルバムは、そんなバンドの“キャラ立ち”の良さと個々の持ち味、プレイヤーピリティが見事

にパックされている。Ashura 画伯のジャケットデザイン(秀逸!)そのままに、1曲目の寝覚めの一声から、ラストの美しいマンドリンの響き、波や花火の音まで、楽しさはもちろん、いい曲もたっぷり、演奏もゴージャス。珍味も旨味もぎっしり詰まった、まさに特上の天井の感(失礼!)。いや、ほんとに聴き応えあります。

## ジャグバンドの歴史、スタイルの変遷

せっかくの機会なので、少しジャグバンドの歴史を辿るのも一興かと思う。ジャグバンドの発祥の地は、ブルーグラスと同じケンタッキー州(ルイヴィル)。その起こりは高価な楽器を買えない黒人の労働者たちが身近にあるジャグ瓶や洗濯板、果ては櫛などの小道具を持ち寄って音を鳴らしてみたところ、持ち前のリズムとグルーブ感と相まって、実に面白い音楽が生まれた、というのが実際のルーツだろう。

1920年代になるとテネシー州のメンフィスあたりからウィル・シェイド率いるメンフィス・ジャグバンドやガス・キャノンのジャグストーンパーズといった、今日では“教科書”とされるジャグバンドが幾つか登場し、多くの素晴らしい録音を残している。この頃の音源を聴くと、ベースになっているのはやはりブルースやラグタイムである。それにしても、モンロー・ブラザーズやカーター・ファミリーの活動とほぼ同時期に、こうしてジャグバンドも人気を集めていたのだと知ると、今更ながら、当時の米国大衆音楽の多彩さに驚かされるのだが、ジャグバンドは本来のフレキシブルな音楽性に加え、フィドルやバンジョー等の楽器を用いられているケースが多いことも関係したのだろうか、やがて他の音楽と混ざり合いながら、そのスタイルを変えていく。

たとえば、キング・オブ・カントリー・ミュージックとして知られるロイ・エイカフは、自身のショーの中にジャグ・バンドをフィーチャーしていたことがあるそうだ。そのスタイルを引き継ぐ形でテネシー・マフィア・ジャグ・バンド、あるいはエド・ダイ率いるナッシュビル・ジャグバンド等々が誕生してくるところをみれば、ナッシュビル・アンダーグラウンドとジャグバンド音楽の結びつきは極めて強かったと言えるかもしれない。さらに、60年代になるとジャグバンドはブルーグラス、オールドタイムと劇的に交錯することになる。

以前、自分の本の取材でニューヨークに行った際、インタビューした数人のミュージシャンにかつ

て彼らが組んでいたジャグバンドのことも少し尋ねたことがある。60年代にマリア・マルダーやデビッド・グリスマンらとイーヴン・ダズン・ジャグバンドをやっていたジョン・セバスチャンは「僕たちはジャグバンドをシティのヒルビリー音楽、という捉え方をしていたよ」と言い、ステファン・グロスマンに誘われてバンドの練習を見に行き、試しにやってみると面白かったと、ジャグバンドを始めたいきさつを話してくれた。アーティ・トラウムは当時を振り返って「ジャグバンドは他のフォークやブルース、ブルーグラス同様に若者にはポピュラーな人気があったよ」と言っていた。

こうした白人の若者たちが、初期のジャグバンドを参考に、60年代にニューヨークやボストンでいわばリバイバル・ジャグバンドとして始めたのが先述したイーヴン・ダズン・ジャグバンドやジム・クエスキンのジャグバンドらであった。どちらも腕達者なメンバーが揃い、特に後者はバンジョー奏者のビル・キースやフィドルのリチャード・グリーンが途中から参加するなど、ブルーグラス畑で活躍するミュージシャンを注入することで、ストリング・バンド系のジャグバンドへと演奏スタイルはシフトしていった。

ラグパパはまさに、このリバイバル・ジャグバンドの父ともいえるべき、ジム・クエスキンを師と仰ぎ、結成されたと聞く。先に触れたデビュー時の共演は、ファーザー＆サンズよろしく、さぞかし感激のものだったろう。

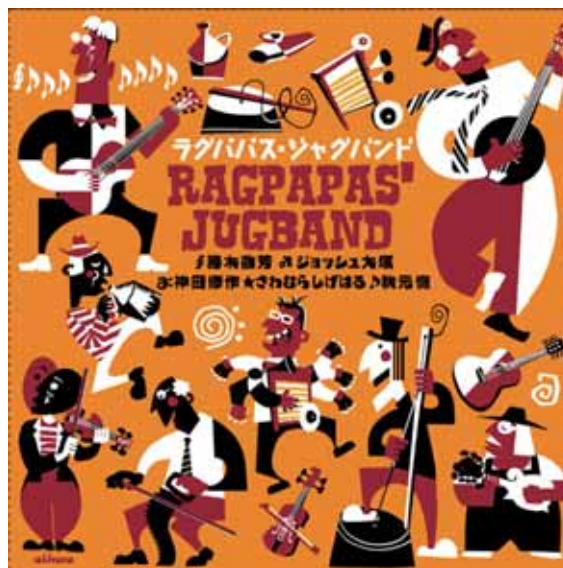
### ライブ、フェスでシーンの活気に期待

「始めたころにアルバムを作ろうって話はあったんやけどね。で、今頃になってやっと出せたんだけど、完成したばかりなのに、早く2枚目が作りたい、なんて気持ちになってる（ジョッシュ大塚）」というように、アルバムの完成に伴って、バンドの勢いもヒートアップしていることだろう。そう、チャンスはこれまでに幾らでもあったはずなのに、彼らが「今」というタイミングでアルバムを出したのは、それなりの理由があるのだと思いたい。

つまり、今、「ジャグバンド熱が来て」いるのである。敏腕プロデューサー、ジョー・ヘンリーが手がけた若手の黒人三人組からなる Carolina Chocolate Drops の「Genuine Negro Jig」は昨年、大きな話題をさらったし、すっかり恒例のものとなり、ラグパパも毎回参加している横浜ジャグフェスは、今年でめでたく10周年を迎える。全国から多数のジャグバンドが参加するなか、先述した

Ashura 画伯率いる「元祖」他、近年はブルーグラス系バンドの参加も増えてきている。奏でる音は騒々しいけれど、静かにブームが起こりつつあるのかもしれない。そんな、キリのいい10周年目のフェスで、本アルバムをひっさげてラグパパと Carolina Chocolate Drops の共演なんて実現しないだろうか、つい夢見てしまったところである。

「ラグパパさんたちとジム・クエスキンのジャグバンドは共に全員のキャラクターがはっきりしているところが似ているように思う。それがあって、しかもバンドとして息がぴったりなところが良い。もし、クエスキンのバンドがまた来てくれた時にはぜひ共演して欲しい」（トムスカビン代表 麻田浩）



● RPJB-2010 『ラグパパス・ジャグバンド』  
CD¥1,575-(本体 ¥1,500-)

(問い合わせ) RAGPAPA'S JUGBAND

ragpapasjugband@gmail.com

(株)ビー・オー・エム・サービスからも購入できます。

<http://www.bomserv.com/rpjb2010.html>